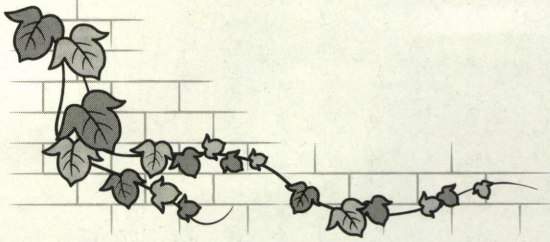


幼稚園の源流を求める旅
森有礼の第二次在米時代(7)

ボストン晩餐会と全米教育協会大会



国吉 栄

エマーソンのスピーチ

アメリカでの図書館仕事で私が入力したことの一つは、新聞記事から森有礼の動向を調べることであった。主要新聞については日本関係記事を抜粋した文献が出ているが、私は地方紙を調べたいと思っていた。当時アメリカはすでに新聞王国であった。各地で数多くの新聞が発行されている。そうした記事から具体的に彼の足跡をたどりたいたいと思ったのである。幼稚園史との関係で興味深い発見は *Boston Daily Evening Transcript* にあった。ボストン商工会議所が一八七二年八月二日に岩倉使節団のために催した晩餐会の記事である。岩倉使節団研究ではすでに知られている記事であるが、実際に読んでみると、幼稚園史にとって思いがけないことが書かれていた。

日米の旗が交差して掲げられた広い会場の、エキゾチックな花々で飾られたテーブルに二百人ほどが席につき、豪華な料理が供された。主賓席中央にはボストン市商工会会頭ライス、その右に岩倉具視、連邦政府財務長官バ

ウトウエル、大久保利通、収税官ラッセルと続き、その次に森有礼、次いでラルフ・エマーソンである。森の隣にエマーソン？

贅^{ぜい}を凝らした食事後、スピーチ交換が始まった。塩崎智「アメリカ「知日派」の起源」(2001)によれば、エマーソンはこの晩餐会への招待をさほど喜んでいなかったらしい。むしろ、暑い盛りに面倒な、くらしい気持ちだつたようである。彼のスピーチはマルコ・ポーロのジパング発見から始まり、大統領フィルモアの英断によつてペリーが派遣され今日に至る日米の歴史が開かれた、という型どおりの話であつた。ところが、スピーチの後半、彼は熱心に語り始めたのである。

エマーソンはかつて日記に、日本人は「もし切腹を命じられたら、將軍や自分より高位の者に従わなければならない。彼らの心臓に、頭に、身体に、服従の精神は満ちている」と書き、主人への絶対服従や切腹に嫌悪感を示していたという。その彼が晩餐会の席上、私は日本について本当に無知であつた、と前置きして日本人の国民

性の強さの表れとして自害に言及した。

すなわち、日本においては、若者は、護り補佐すべく委ねられた者を、所屬する階級の最も上質な人間と同等に育て上げようとし、また、自分以外の階級の者たちより優れた人間に育て上げようとするが、それができないと悟ると、悩み苦しみあまり自分の国に帰ることができない。結果として、彼は自己犠牲という結論を引き出し、主君への忠誠心を失うくらいなら喜んで自害しよう^{と覚悟するのであるという}。驚くべき特質である。私はこのことを知つたばかりである。われわれの、いい加減で商業主義に毒された通俗的な文明社会においては、到底理解することはできない。しかし、それを有する国民にとつては絶大な力なのである、と。

これが、二時間にわたる会食中の森との会話の成果であつたことは疑いを入れない。ここに語られているのはエマーソンが理解した森の言葉そのものであつたろう。切腹の話題はエマーソンが出したのであろう。それこそ彼が知る日本であつたから。何より注目されるのは、自

害が、教育との関係で語られていることである。ここに語られた日本における若者の教育とは、森の故郷鹿児島での郷中教育そのものであるし、任務を果たさなければ自分の国に帰ることができない若者とは、まさに森有礼自身の姿であろう。

森は激しい非難を浴びながら廢刀論を主張し、そのために地位を追われ、命をも狙われた人間である。自分に向けて刃を振るう切腹ならばよし、と考えていたわけではない。彼は、(自分は) 上位の者に服従して果てるのではない、同胞である国民を育てるという自らの責務に命をかけているのである、という意を切腹の話題において伝えたのであろう。だからこそエマーソンは、自害を受身の行為としてではなく、人としての強さととらえたのである。

全米教育協会大会出席と名誉会員

続いてエマーソンは次のように述べて、スピーチを締めくくった。「皆様の最大の関心は教育であると伺いま

した。私が皆様に差し上げられる最上のアドバイスは、来週、当市において、全米教育協会 (N E A) 大会が開かれ、そこにミズーリ州セントルイスのハリス氏が参加されることをお伝えすることでありましょう。ハリス氏はセントルイス市の教育長であり、本邦唯一の思弁哲学誌の編集者であり、大変学識があり、大変有能な、とりわけ教育という特別なテーマにおいて大変に有能な方があります。皆様がぜひハリス氏とお知り合いになるようお勧めします。氏もそれを喜ばれると信じて疑いません。この問題について、ハリス氏ほど適切に助言することのできる人を私は知りません」。

次週開催予定の教育大会の告知と、遠隔地の教育長の名前。エマーソンらしからぬスピーチの締めくくりである。動機はもちろん会食中の森との会話である。森は公教育について、あるいは国民の教育について、熱心に語ったのであろう。エマーソンはこの若者の熱い思いに何とか応えたいと思ったのである。

エマーソンが教育について相談するに最適の人、と紹

介したハリス(William T. Harris)は、少壮ながらエマーソン、ピーボディー、ブロンソン・オルコットらの友人で、のちに彼らの住むコンコードに移り住み、共に夏の「コンコード哲学の学校」を運営する。後年連邦政府の教育局長ともなる。ピーボディーからセントルイス市に公立幼稚園を導入しよう粘り強い説得を受けた彼は、すでに同市の教育委員会に対し、公教育の中に幼稚園を採用するよう勧告していた。晩餐会の翌年には、同市に全米で初めて、正式に公立小学校に幼稚園が組み込まれる。

晩餐会の翌週、ボストンにおいて、三日間にわたって N E A の第十二回大会が開かれた。その初日に、岩倉使節団は長引いた米米滞留を終えて英国に向け出発した。何かと気苦労の多かった使節団一行を見送り、森は一人で大会に参加する。

会議は、午前と夜の部は合同で、午後の部は、初等教育・教員養成・教育長・高等教育の四部会に分かれて行われた。初等教育部会では、ルイスヴィルのヘイルマンが「フレイベル主義のアメリカ教育制度への適用」と題

する論文を発表し、その効果についての検討委員会の設置を要請して可決された、米米幼稚園史上記念すべき会議となった。もちろん、ピーボディーによる発題もあった。教育長部会ではハリスが連日活発に発言していた。

使節団出発後も森には用務があり、連日、あるいは終日、会議に出席することはできなかつたと思われる。しかし、大会最終日、閉会式に出席した森が、議長からゲストとして紹介され、満場の温かい拍手に迎えられてスピーチをし、初代教育局長ヘンリー・バーナードやブロンソン・オルコットらと共に、N E A の名誉会員に選ばれたことが記録に残っている。

エマーソンの助言は、晩餐会の席上、岩倉使節団に発せられた。しかし使節団一行は教育大会開催当日の午前中にボストンを発った。肝心の教育担当理事官田中不二磨は、すでに五月に新島襄を伴って英国に出発していた。会議でハリスと会談し、さらには全米の教育関係者と一堂に会したのは、森有礼ただ一人であった。

(彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師)